

# 図書館だより

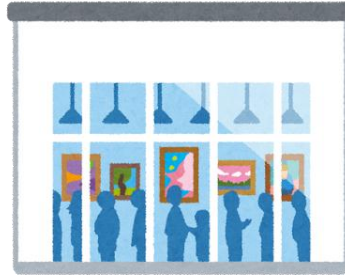


No. 6

平成 27 年 10 月 29 日発行

2年生のみなさん、修学旅行からおかえりなさい。オーストラリアでは、どんな思い出が出来ましたか。貴重な体験をたくさんしてきたことだと思いますので、その経験を活かしていきましょう。

1年生は秋の教養散策として上野へ行ってきましたが、芸術の秋を楽しんで来られましたか。上野には、東京国立博物館をはじめ、国立西洋美術館、国立科学博物館、上野の森美術館など数多くの美術館・博物館があります。常設展のほか、それぞれで様々な企画展を行っており、こまめにチェックしていると興味をそそられるものに会えます。2、3年生のみなさんも今年の秋は美術館・博物館を散策してみませんか。自分でも思いがけない作品との出会いが待っているかもしれません。「美術館・博物館で見たあの絵のことをもっと知りたい」と思った人は図書館の美術書のコーナーを活用してください。



## 東京国立博物館\*

### 069-ト『こんなに面白い東京国立博物館』 東京国立博物館 || 監修 新潮社

東京国立博物館には本館、平成館、表慶館、法隆寺宝物館、東洋館の5つの展示館があります。平成16年に全面リニューアルオープンし、日本の美術一万二千年の歴史の流れを追っていきける本館、平成11年の新装オープンにより保存と公開の両立が可能となった法隆寺宝物館など、その魅力は館ごとに異なります。館内の展示物の解説だけでなく、建物自体の美しさにも触れ、訪れたことのある人もまた行きたくなる見どころが存分に紹介されています。時期ごとの企画展に訪れるのもいいですが、常設されているものだけでもこんなに楽しめるのかと新たな発見がたくさんあります。また、部外者立入禁止の収蔵庫の様子や秘蔵品の数々など、ディープな東京国立博物館も覗けます。

## まだまだあります都内の美術館\*

### 706-ウ『東京のちいさな美術館めぐり』 浦島 茂世 || 著 G. B.

東京には想像している以上に美術館がたくさんあるのです。それは大きな美術館ではなく、「こんなところに美術館があったんだ」と驚くような小さな美術館。銭湯や木造アパート、中学校などを改装して作られた美術館、資生堂や出光、杉野学園など、会社や学校が運営する美術館、実業家の邸宅や芸術家のアトリエを使った美術館、など個性光る小さな美術館がよりどりみどり揃っています。小さな美術館ならではの魅力やぬくもりが伝わってきて、「行ってみたい！見てみたい！」と一目惚れしてしまう美術館にたくさん出会えます。併設されているカフェのメニューもとってもおいしそうです。そっちに惹かれるのもアリですね。

## 読書会へのお誘い

先月の映写会に引き続き、今月も図書委員会主催のイベントを行います。今月行なうのは“読書会”です。読書会は1学期にも行っていますが、みんなで集まって1冊の本について語り合う会です。と言っても堅苦しい会ではなく、本のことを語りながら女子会を楽しむ！という気軽な会なので、ぜひたくさんの人に参加してほしいです。最近は色々なところでこの読書会が開催されており、話題にも上ってきているので、興味を持っている人もいることだと思います。自分だけで本の世界を味わうのも楽しいですが、みんなで1冊の本についてその魅力を語り合うというのも分かち合える楽しさや新たな発見をする楽しさがあります。

もちろん1人での参加も大歓迎。当日は図書委員会イベント班が参加し、楽しい読書会になるよう進めていきますので、安心して参加してください。読書会をきっかけに新たな友だちを作ってください。

### 読書会

日時: 11月5日(木) 16:10~17:00(予定)

場所: 秋草記念館 1階 生徒ホール

作品: ぐりとぐらのおきゃくさま

参加したい人は図書館カウンターに事前に申し込んでください。



## 019-シ『百年読書会』 重松 清 || 編著 朝日新聞出版

朝日新聞の紙面で行われた読書会。太宰治の『斜陽』、夏目漱石の『坊っちゃん』、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』など、世代を超えて読まれている12作の名作に感想を寄せ合うという企画で、この本を読むことで読書会体験を楽しむことができます。同じ1冊でも、読む人それぞれの感じ方があります。思いが重なる喜びや異なる見方への驚きなどを共有することで、その本の世界が膨らみ、「また読みたい！」という気持ちになります。読んだことのない本も様々な飛び交う多くの人の感想に魅かれ、この本を読んだら自分は一体どんな感想を持つのだろうと興味が湧いてきます。ぜひ興味を持った本は新たに読んでみて、その後もう一度、この本の中の読者たちと読書会をしてみましょ。

## 933-シ『ガンジー島の読書会』 マリー・アン・シェイファー/アニー・パロウス || 著 イースト・プレス

手紙での交流が描かれた本。説明的な文章は一切なく、手紙だけで物語が進んでいきます。主人公は女流作家のジュリエット。たくさんの手紙が飛び交う中、彼女の下にガンジー島に住む青年から手紙が届きます。そこには、本を読むことの喜びが書いてあり、これが彼女とガンジー島の読書会との出会いとなりました。ドイツ軍の占領下にあり、大戦後も不自由な暮らしを送っているガンジー島の人々。その彼らの心の支えとなっていたのが読書会でした。ジュリエットはこの読書会に興味を持ち、他のメンバーとも手紙のやりとりを始めます。本について語っている人々の生き生きとした様子が手紙から伝わってきて、なぜ人は本を読むのか、その答えがわかってくる気がします。

## 読書週間が始まりました

27日から読書週間が始まりました。毎年行われているこの読書週間の始まりはなんと1947年！長い歴史を持っています。読書推進運動協議会のホームページを見ると、歴代の読書週間ポスターが見られたりもしておもしろいですよ。



今年の読書週間の標語は「いつだって、読書日和」です。この標語のとおり、みなさんにはいつも本が身近にある生活を送ってほしいなと思います。今まで本を読んでこなかった人も1冊の本との出会いで、大の本好きに変身するかもしれませんから、まずは本を手にとるところから始めてみましょう。

今年の読書週間には、シチュエーションに合わせて「こんな時はこの本！」と、たくさん本をみなさんに紹介したいと思います。

### 冬に読みたくなる本\*

B913.6-オ 『ネバーランド』 恩田 陸 || 著 集英社

伝統ある男子校の寮「松籟館」は、冬休みを迎え、寮生のほとんどが自宅へと帰省した。そんな中、それぞれの理由から、寮へ残った美国、寛治、光浩の3人。そこに、自宅暮らしの統がなぜか混ざり、4人で過ごす年末年始が始まった。

親友と呼ぶほどの仲でもなく、かといって仲が悪いわけでもない。そんな付かず離れずの関係にある4人だったが、人気のなくなった寮で4人きりで過ごす中で、お互いが胸に秘めていた闇を共有し合うことになる。ぶつかりながら、戸惑いながら、自分の心と向き合い、仲間の痛みに触れる。そして、翌日にはまたあっけらかんとふざけ合って、笑い合う。そんな繰り返しの7日間で彼らは成長し、かけがえのない絆を育んでいく。

### 眠る前に読みたくなる本\*

944-ハ 『キリンと暮らす クジラと眠る』 アクセル・ハッケ || 作  
ミヒヤエル・ゾーヴァ || 絵 講談社

『じつのところ、ぼくたちは彼らのことをあまりよく知らない。現代社会でふつうに生活している限り、彼らに接する機会なんてほとんどないのだから、それもしかたないのだろう』という言葉が冒頭にありますが、確かにほとんどの動物には実際に接する機会がないものです。そんな動物たちの生態をユーモラスに描いた短編集。「フラミンゴ スーパーモデルたちの孤独」、「ゴキブリ 命がけの片想い」、「ハト 失業者たちの憂い」など、タイトルからして ユーモアセンスが滲み出ています。おもしろいだけでなく、どこか子どもの頃に返ったような気持ちになれる本でもあるので、動物たちの愛らしい姿を思い浮かべながら、眠る前のひとときを楽しんでください。もしかすると、読んだ動物がそのまま夢に出てきてしまうかも！？

### 待ち合わせの時に読みたくなる本\*

914.6-ム 『村上さんのところ』 村上 春樹 || 著 新潮社

村上春樹さんが期間限定で開設していたサイト「村上さんのところ」へ寄せられた3万7465通ものメール。村上さんはその全てに目を通し、3716通を選び、返信。さらに、その中の473通が書籍として出版されました(電子書籍では3716通全てが読めます)。恋愛、人生、仕事、趣味とあらゆる方向から飛んでくる読者のメールは「さすが村上ファン！」と言いたくなるものばかりです。そして、どの質問にも絶妙な回答をくれる村上さんも「さすが村上さん！！」です。『まるで降っても降っても降りやまぬ大雪を、一人でシャベルを持って雪かきしているみたいでした』と村上さんはおっしゃっていますが、そのご苦勞のおかげで、深く頷いたり、プツと吹き出したり、新たな気づきをしたり、読者は楽しい時間を送れます。待ち人がどんなに遅れてもこの本があれば退屈知らずです。

### 電車で読みたくなる本\*

B913.6-コ 『5分で読める！ひと駅ストーリー 乗車編』 『このミステリーがすごい！』編集部 || 編 宝島社

25名の作家さんの読みきりの短編が読める豪華な1冊。書名のとおり、それも5分で読めてしまう短いお話ですが、その短い中に驚きや感動、笑いなど、たくさんものが詰まっています。十分な読みごたえがあります。どのストーリーもキーワードとなるのは“電車”です。電車の中で様々なドラマが巻き起こりますので、電車の中で読むと臨場感あふれる読書が楽しめることでしょう。また、この短編を機に「この作家さんの本をもっと読んでみたい」と思う作家さんにも出会えるかもしれません。そんな出会いも期待しながら、読み進めてください。

乗車編を読んだ後には、降車編もぜひ読んでみてくださいね。こちらも多く作家さんが参加しています。

### 雨の日に読みたくなる本\*

913.6-イ 『死神の精度』 伊坂 幸太郎 || 著 文藝春秋

彼の名前は、千葉。職業は死神。情報部から渡されたスケジュールのもと、人間に変装して、対象となる人物に会い、1週間の調査を行う。そんな彼が下界で仕事をする時は、なぜかいつも雨が降る。まだ一度も青空を見たことがないというのだから、その確率は100%だ。

死神と人間の出会いなんて決して喜ばしいものではないけれど、千葉と対象者の不思議な交流には、血の通った心があり、結末はそれぞれ異なるけれども、後味の悪さを感じることはありません。それは真面目すぎて発言がおもしろくなっていたり、淡々としているのに大好きな音楽を聴いてニヤけていたり、やたら核心をつく一言を発したりと、死神だからと憎みきれない千葉の人柄(?)が影響しているからなのでしょう。

### 図書館で読みたくなる本\*

913.6-タ『図書室のキリギリス』 竹内 真 || 著 双葉社

高校の図書館で働くことになった詩織。本は好きだけれど、図書館で働くのは初めてという詩織は前任者の残した手引きと、司書教諭の若林先生や常連、図書委員たちからの情報を頼りに図書館業務をスタートさせる。そんな詩織にはある特別な力があつた。それは、物に残った人の思いを感じることができるというもの。感じるができるのは強い思いが残っている時だけではあるが、その力を役立て、図書館で起こるハプニングを解決していく。作中にはたくさんの本が登場するので、「その本知っている！」と言いたくなるシーンがいくつもあるのが読んでいて楽しいです。

本に触れた時に、その本を読んだ人の温かな気持ちが残っているのを感じることができるっていいなと司書としてはそこを羨ましく思いました。

### 目覚めと共に読みたくなる本\*

596-ヤ『朝ごはんからはじまる』 山本 ふみこ || 著 毎日新聞社

随筆家・山本ふみこさんが書く食にまつわるあれこれ。見開き1ページで、完結しているので、どのページからでも読めます。日常の何気ない台所の様子や食卓の様子からは、山本さんの食にかける特別な想いが伝わってきます。忙しい中でも、自分が楽しむことを忘れずに、ごはんを作る。素材を大切に、我が家ならではの工夫を加えて、ごはんを作る。自分が食べているごはんもこんな風に大切な想いが込められているのかなと想像して食べてみると、きっといつも以上にごはんがおいしく感じられることでしょう。自分が作る側に立つ時にも、心がけていきたいことがたくさん詰まった素敵な本です。そして、朝ごはんを抜きがちな人もこれを読んで、「朝ごはんを食べよう！」という気持ちになってもらいたいと思います。

### 放課後に読みたくなる本\*

B913.6-ヤ『放課後の音符』 山田詠美 || 著 新潮社

些細なことに悩んだり、イライラしたり、ドキドキしたり、嬉しくなったり、10代の心って、複雑で、とっても忙しい。そんな十代を生きる少年少女を主人公にした短編集です。それぞれ別の作家さんが書いた物語なので、色々な作風を楽しむことができます。中には、女子高に通う主人公が登場する物語もあるので、みなさんは「その気持ち、わかる！わかる！」と共感するところが余計に多いかもしれないですね。

何かを窮屈に感じたり、誰かをわずらわしく感じたり、漠然と不安になったり、そういうのが自分だけじゃないんだってわかるだけでも、心がスッと軽くなるのではないかなと思います。なんだかちょっと疲れたなと感じた放課後には、この本で息抜きしましょう。

### 公園のベンチで読みたくなる本\*

913.6-セ『雪には雪のなりたい白さがある』 瀬那 和章 || 著 東京創元社

横浜の港の見える丘公園では、コンプレックスを抱えた女子大生とおじいさんとの出会いがあり、飯能のあけぼの子ども森公園では、すれ違ってしまったままのふたりが5年分の胸の内を語り合い、練馬の石神井公園では、バードウォッチングが趣味の少年が思い出の人との再会にあたふたとし、所沢の航空記念公園では、彼との思い出が詰まった公園で約束の言葉をかみしめる。春夏秋冬、季節の異なる4つの心温まるストーリーが楽しめます。

航空記念公園はもちろん、他の公園も「知っている！」という人がきっと多いはず。どの公園も1日あれば行ける距離にありますので、ひさしぶりに行ってみたいとなった人、そういえば行ったことないなと思った人、みなさん、次はこの本をお供に公園散策に出かけてみてください。

### おしゃれの真髓を求めて読みたくなる本\*

B933-ワ『プラダを着た悪魔』 ローレン・ワイズバーガー || 著 早川書房

ファッションに興味のないアンドレアが勤めることになったのはアメリカ一番の発行部数を誇るファッション雑誌ランウェイの編集部。何百万という若い女の子の憧れの仕事に就いたなんて光栄よ！とみんなは言うけれど、編集長ミランダ・プリーストリーのアシスタントは想像を絶する過酷さ。プラダ、グッチ、シャネル、アルマーニ、フェンディなどなど、名だたるブランドの商品とおしゃれでスタイル抜群のスタッフに囲まれた華やかなオフィスで、アンドレアはミランダから押し付けられる無理難題にてんてこ舞い。それもこれも夢を叶えるためと頑張れば頑張るほど、親友とも恋人とも家族とも溝ができていく。その様子には読んでいこつちもハラハラしっぱなしだけど、くじけそうになることばかりでもパワフルに働くアンドレアへエールを送りながら読んでしまおう一冊。

### 旅先で読みたくなる本\*

B914.6-カ『幾千の夜、昨日の月』 角田 光代 || 著 KADOKAWA

旅のスタイルや行き先によって、その選択は大きく違ってくるけれども、何か1冊は本を持って旅に出たい。一人旅なら移動や食事を待つ時間の相棒として、仲間との旅ならちょっとだけ持ちたい自分時間へのアイテムとして。もちろん旅の荷物は少ないに越したことはないから、単行本よりは文庫本が好ましい、しかも旅半ばで読み切ってしまうのは寂しいから、ある程度のページ数は欲しい。さらに、本に夢中になりすぎて旅がおざなりにならないよう短編集で、旅と同じく非日常な話ならなおよろしい。この本には角田さんが経験した、心細さと非日常感を道連れにした旅の夜が書かれています。砂漠の野営、安宿で感じる不安、仲間との香港食い倒れ、そして旅先の夜にひとと話すことで本当のその人に会える感覚。この本と旅すれば、その先で新しい友だちが出来そうです。

## 🌟「今月はこの本を読みました」特別編🌟

今月は特別編として、なんとスペシャルゲストをお招きして、今月読んだ本を紹介していただきました！！ご協力してくださった今井先生、丸山先生、鈴木先生、結城先生、ありがとうございました。

『まず歩きだそう 女性物理学者として生きる』米沢富美子 著 (289-ヨ 岩波書店) を読みました。

ここ数年、物理に関するノーベル賞受賞のおかげで、ニュートリノや素粒子、青色発光ダイオードなど、物理の重要概念や研究が世間に知れ渡るようになった。

私が物理学科進学に向けて物理の勉強に没頭していた頃、男性物理学者は東大教授竹内均、女性物理学者は米沢富美子(この本の著者)の研究者二人が双璧をなしていた。もちろん他にも優秀な物理学者は沢山いたが、知名度と実力は群を抜いていた。

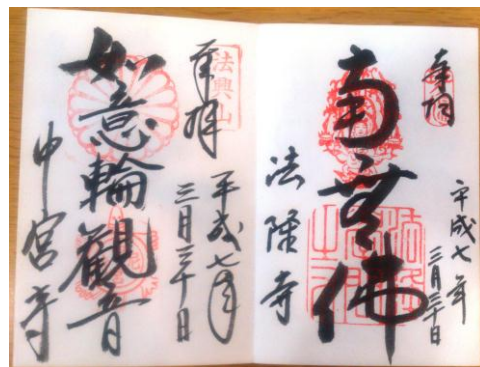
その後、私は数学に大きく興味が傾いたため数学科に進学をしたが、違う世界の数学科で学んでも、米沢氏の天才的な頭脳ぶりは、よく話題にあがっていた。

岩波ジュニア新書からこの本が発売されると同時に、すぐに手に取ったが問題に対する取り組み方の一つとして「問題を作成した人の心情を考える。」つまり、「問題を入口からでなく出口から考える」という部分を紙が擦り切れるほど読んだ。今でも問題を解くときの私のマニュアルである。米沢氏が研究に一番油の乗っていた時代は、残念ながら女性理系研究者が活躍できる環境が熟しておらずその研究のレベルの高さが十分に評価されきれなかった。それでも、慶応大学教授にヘッドハンティングされたり、日本物理学会会長に就任するなど多方面で活躍された。お薦めの一冊である。 【今井勸先生】

『御朱印ブック』八木 透 著(186-ヤ 日本文芸社)を読みました。

図書館で思わず手が伸びた先には本書『御朱印ブック』があった。何となく懐かしく思い手が伸びた。そういえば最近あまり使っていない「御朱印帳」が家にあったことを思い出した。以前は旅に出るたびに意識して「御朱印帳」を持参した(意識しないと忘れてしまう)。全国には寺が約 86,000、神社が約 88,000、合わせて何と約 174,000もの神社仏閣があるという。ものすごい数が日本全国にあるものだと驚嘆したことがある。でも、これらすべての神社仏閣で「御朱印」を行っているわけではなく、やはり有名どころが多い。

旅先に「御朱印帳」を一冊携帯すれば、日本全国いたるところで「御朱印」を頂くことができ、旅の楽しみが増えること間違いなし(今の相場は300円くらいかな)。『御朱印ブック』を読んで、それまで「御朱印」を集めることが目的であったが、それぞれの「御朱印」の意味を知ることができてさらに楽しみが増えました。是非、一読を！そして旅を！ 【丸山壽先生】



『イニシエーション・ラブ』乾くるみ 著 (B913.6-イ 文藝春秋)を読みました。

夏休みに課した読書レポートの中にこの作品を読んだ生徒がいて「最後から二行目で驚く」という感想があったので実際に読んでみることにしました。

大学生の鈴木は友人からの誘いで急遽合コンに参加することとなり、そこで出会った「マユ」と恋に落ちる。初めは「最後の二行目で驚く」ということを忘れ、普通の恋愛物語として読み進めていきました。一組の男女の純粋な恋、すれ違いによる仲違い、揺れ動く感情…。

そのまま読み進めて話題の「最後の二行目」に差し掛かった時、自然と本から目を背け考え込む自分がいました。「どういう意味だ？」落ちていて話の内容を整理して結論に行き着いた時、この作品の綿密なストーリー展開に驚きました。

「必ず二回読みたくなる」その気持ちは十分わかりますが、私にはその勇気がありません。その理由は読んでみればわかります。 【鈴木信滉先生】

『きらきらひかる』江國 香織 著 (B913.6-エ 新潮社)を読みました。

皆さんは「普通の子高生」ですか？自分は普通だ、と思っている人もいれば、いや、そんなことはない、と思っている人もいるでしょう。例えばぼくでいえば、教えているのは美術で男子にしては小柄なほうです。ということは「小柄な美術の先生」ということになります。普通の定義は難しいですが、こういう風に皆何かしら特徴を持っています。いい面だけでなく、コンプレックスの面も。

さて、この本は「アル中の妻」と「ホモの夫」と「その恋人(男)」の物語です。では、この人達は「普通」ではありませんか？そんなことはないとぼくは思います。ちょっと変わった特徴があるだけ。妻も旦那さんも恋人もそれぞれを思いやっています。そのためにすれ違うこともあります。こういう風に人を大切にできることは素敵だと思います。ぼくがアホな男子高生生の頃は読んでもよく分かりませんでした。今はとても爽やかないい本だと思います。皆さんはどう感じるでしょうか…。 【結城唯善先生】

『天国旅行』三浦しおん 著 (913.6-ミ 新潮社)を読みました。

きっかけは、現在放送中のドラマ『偽装の夫婦』で天海祐希演ずるヒロイン嘉門ヒロが、この本の一文を口にしていたからです。嘉門さんは町の図書館司書、読書が大好きな女性で1話ごとに本からの引用を暗唱する場面がでできます。第1話はチェーホフの「かもめ」、第2話は『家なき子』(安達祐実のドラマではなく児童文学です。マロ 著)そして第3話では、更生しようと頑張っている青年に犯罪をそそのかす彼の昔の悪い仲間たちに向かって『あんたにはわからないだろう。心配してくれるひとが一人もないまま生きてくつのが、どんなことなのか。ある日ふいに姿を消しても、だれも探さずだれも悲しまない。これから俺のまわりには、クズばかり集まってくるはずだ』三浦しおんの「天国旅行」の一節です』と本の言葉によって、青年の心情を伝えます。『家なき子』は読んだけれどこの本はまだだったと、ちょっとした負けず嫌いで今回読んでみました。この先、部屋の床を抜かすほどの読書家・嘉門さんの読書量にくらいついていけるか(ロシア文学は除かせて下さい)が、このドラマの私の楽しみ方です。 【鈴木】